島嶼区分が今まで無かったことのほうがもっと不思議である。

以上の地域区分を始め，本書に収められた多くの論文は，経済的な観点を主にしてまとめられている。その反面，従来の離島研究において大きなシェアを有していた民俗的な論考はほとんどみられない。かつての九学会連合の調査などでは奄美や対馬，佐渡など離島が主要な調査地であったし，奄美，沖縄の島々とくれば格好の写真集のモチーフであったことを思い起こすと，やや物足りなさを感じないわけではない。

しかし，それは逆に健全な島嶼地域へのまなざしであるのかもしれない。かつて出版された多くの離島の写真集，特に南西諸島のそれに評者はある種のまなざしを感じていた。それは他者を見るというまなざしである。もっといえば異形を見るまなざしであり，異形を見るために意図されたまなざしである。それらの写真集の出版は記録を残すという作業なのであるが，そこに自分たちと異なるものを物珍しそうに見るというまなざしがありはしないか。まなざしに高い低いは有りはしないか。取材や調査という「錦の御旗」を掲げて彼らを写したのではないか。そういうことを常々感じていた。幸か不幸か，写真集の被写体となった彼らの表情からは写されるということに対する何の屈託も評者には読みとれなかった。しかし，これらの写真は明らかに外部の者が写した写真であり，写した側にとっては被写体の世界が「よその」世界となる。評者はそこに何かしら越えがたい違和感を感じていたのである。

この写すものと写されるもの，調査者と被調査者の垣根をどうこえていくのか，それは調査者，研究者としての自分自身の課題でもあった。しかし，本書にはかつての南西諸島の写真集に評者が感じたようなまなざしはない。むしろ，本書は離島を他者とみるのではなく，現在の経済環境の中でどのように地域が存立するのかという自分自身に共通する対象としてみている。経済環境を対象とすることで読者の世界と共通のテーマ，あるいは読者の世界に連結する離島の姿を描くことが可能になっている。その意味で本書のまなざしは，従来の離島研究とは異なり，地味ではあるが堅実な観点を有していると評者は考える。

例えば，河原の論考はテレポーテーションのように遠隔地とつながる離島の社会経済的結びつきを描いていておもしろい。島民の移動先の分布は海に囲まれた島ゆえ，船を使った移動ゆえの妙味であり，海上に無数に張り巡らされた漁民・島民のネットワークを浮かび上がらせている。また，ダイビングショップ経営者や「ヤマト嫁」に関する細かな調査とその整理を行った宮内の論考は，一方でさらに抽象化した議論に踏み込んでほしいという感想を持つものの，本土との関わりの中での島社会の変容を淡々と描き出している。

その一方，本書の論考の中には，「たまたま研究対象地域が離島であった」的な印象を受けるものもないわけではない。その論考で導かれるのと同じ結論が，本土側の漁村や農村，あるいは観光地で行われた同じような調査から導かれるのであれば，それは「離島研究」といえるのだろうか。たまたま離島で行った研究ではなく，離島だからこそ行った研究を読者はこの本に期待しているはずである。そして，離島であるがゆえに，本土にも還元できる視点をより先鋭化して提示しているのだという結論を，あるいは（その周囲を海に囲まれたという）孤立的な存在であるがゆえに，（地理学の主要課題である）地域性の解明に大きな貢献をしたのだという成果を期待しているはずである。

文　　献

辻村太郎・山口貞夫（1935a）：日本群島付近に於ける島嶼の分類および分布(1)．地理学評論，11，pp. 703-728.

辻村太郎・山口貞夫（1935b）：日本群島付近に於ける島嶼の分類および分布(2)．地理学評論，11，pp. 794-808.

（荒木一視）

平岡昭利編著：離島研究

海青社，2003，218 p.，2,800円（本体）
ISBN4-86099-201-6

6歳の頃住んでいた家の庭は，砂浜へと続いていた。父親は，仕事の合間に堤防まで釣りに出かけていた。近くの診療所の老医師は，毎夕欠かさずに海で泳いでいた。ウミガメの産卵を夜な夜な待ったこともある。小学校の同級生は9人だった。

16年後，再びその「島」に行くことになった。同級生のうち2人は町役場の職員になっていた。砂浜には，コンクリートの東屋とすでに廃墟となった海の家が加わり，海岸工事の現場となっていた。

「島」を知れば，知るほど愛着が生まれる。もしかしたら「ふるさと」と呼べる島をみつけられるかもしれない。離島は「遠く離れている」が，その距離を感

じる時にこそ多くの示唆を与えてくれるものではないだろうか。

隔絶性・狭小性・孤立性などで表現される「島」は，他の地域と隔てられた，ある意味究極の地域である。しかし，わが国の離島に目を向けるとそこに多様性があることに気付く。

本書は，その多様性に目を向け，「島」をフィールドに様々な観点から行われてきた地理学的な研究を一冊にまとめたものである。12におよぶ研究の数々は，それぞれが「島」を研究するという共通点を持ちながら，そのアプローチの仕方や関心は実に様々である。編者がこれを1冊の本とするためにそのバランスに相当な配慮をしていることも伺える。それぞれの研究者たちが，各々の関心によって行ってきた研究を，その研究が行われた時期にも差異がありながら，それをも乗り越えて1冊の本が完成しているのである。本書の構成を以下に示す。

Ⅰ．島の特性と結びつき
　1章　島嶼地域の計量的地域区分（須山　聡）
　2章　離島地域における日常生活圏の変化と本土主要都市との結びつき（石川雄一）
　3章　奄美大島，名瀬の郷友会―組織の機能と空間的分析―（須山　聡）
　4章　伊吹島からの漁民の移動と展開（河原典史）
　5章　座間味島の観光地化と県外出身者の存在形態（宮内久光）
Ⅱ．農業と牧畜の島々
　6章　沖縄県渡名喜島・粟国島のキビ栽培の復活とその背景（賀納章雄）
　7章　伊江島の農業展開過程と課題（助重雄久）
Ⅲ．漁業・養殖の島々
　8章　隠岐・知夫里島の肉用牛繁殖経営の展開（大呂興平）
　9章　越智諸島椋名における延縄漁業の魚場利用（田和正孝）
　10章　小呂島の人口維持と漁業の持続性（山内昌和）
　11章　延岡市島浦島の経済的地域構造（中村周作）
　12章　明治前期における家島諸島の3つの浦（平岡昭利）

1章は，わが国のすべての離島を対象にし，それらを概観するためにクラスタ分析を用いて7つに分類している。これによって，離島の分布による地域性を理解することができると同時に，島嶼地域の多様性についても改めて認識することになる。計量的手法による区分を1章にかかげ，その後のフィールドワークを重視した研究へと誘う展開となっている。

2章では，離島地域が県の面積の約45%を占めている長崎県の対馬，壱岐，宇久・小値賀，五島列島を対象にしている。これらの島々は，本土との最短航路が25 km 以上，本土主要都市までの距離が航路で1時間以上の地域である。このような隔絶性を有する地域での離島居住者の生活行動空間の変化を10年のインターバルをおいて観察し，大型小売店の立地などにより域外への行動が少なくなる傾向を示した。また，離島住民の主要都市とのメンタルな関係は，離島と親近感を持つ都市の組み合わせによって大きく異なる興味深い結果を得ている。離島住民の他地域との結びつきを考える際に参考になるだろう。

3章では，鹿児島県奄美大島を舞台に諸集落から島内の中心都市・名瀬市へ移住し彼らが組織した郷友会に着目してその組織の特徴と空間的性格を地元新聞の告知広告や聴き取り調査によるデータをもとに明らかにしている。これまで都市圏と離島との間における同郷団体についてはいくつかの研究があるが，本章は奄美大島内の空間的な結びつきを明らかにしている点で新鮮である。

4章は，香川県伊吹島からの漁民の移動をそのライフヒストリーを描くことで漁民の移動性を検証することが試みられている。漁民の都市周辺への移住や，それに伴う転業あるいは移動をめぐる人的ネットワークなどについても明らかにしている。ライフヒストリー法を用い，漁民の移動性に接近していることは興味深い。

5章では，全国の離島の中でも数少ない人口の増加傾向にある沖縄県の座間味島をとり上げ，その要因となっているダイビングサービスなどの観光産業の成立と，県外出身者の移住に伴う人口構造の変化やその存在形態を考察している。緻密な悉皆調査に基づいた実証研究であり，多くの示唆を与えている。新たな移住者と旧住民とのコミュニティ形成は，興味深い問題であるが，プライバシーの問題がつきまとう。その点で，本章はその限界まで接近している。

6章では，一度は廃れてしまったキビ栽培が様々な要因によって復活していることを明らかにしている。そのなかで渡名喜島と粟国島との背景の違いが比較されていることは興味深い。本書全体にも言えることだが，写真が多く，具体的なイメージを持ちながら読み進めることができる。

7章では，沖縄県伊江島の農業の展開を詳細な記述

で明らかにしている。そういう意味で，本章は一つの離島を対象に網羅的に記述する際に参考にすべき論文であるといえる。

8章は，拡大基調にある島根県隠岐の知夫里島における肉用牛繁殖経営農家に対して，悉皆調査を行い，その経営戦略の展開を明らかにしている。小離島においては，自営業の経営はますます厳しくなっていくと考えられるが，そういった問題に直面する多くの離島に示唆を与える研究である。

9章では，漁業地理学の観点から1970年代後半に行った調査をもとにモノグラフが描かれている。筆者は，当時漁船に乗り込むなどして延縄漁業を直接観察し詳細な情報を得ており，それがいかなる意味を持ったかを「ふたたび問う」としている。20数年の時を経てはいるもののその研究が色褪せることなく活き活きと読むことができるのは，こうした書き方の工夫にあるのかもしれない。本書にはさまざまな描き方が登場するが，それらを比較するためにも本章の存在は大きいといえる。

10章で取り上げられる福岡県小呂島は，人口減少の激しい離島が多いなかにあって，人口を維持している数少ないタイプである。本章では，小呂島の人口維持に漁業と世帯の維持＝「長男が家を継承する」という規範意識が関わっていることを詳細な調査から明らかにしている。

11章は，宮崎県の島浦島のまき網操業行動を時間地理学的な分析と養殖業の実態から経済的地域構造を考察している。本章は9章とは異なる操業行動の描き方であり，比較することで分析手法の違いを理解することができる，1冊の本にこのような試みがあることは，たいへん興味深い。

12章は，兵庫県家島諸島の3つの集落を対象にして歴史地理学的に分析されている。本章は，明治前期を扱っているものの漁業という観点では前章までと一致しており，また現在の地域像を解釈するという立場から考察を行っている点も特徴といえる。そのため，研究方法や扱っている時代や島こそ異なるものの，他章やその他の離島集落への視座を持つ際に有効になる研究であるといえる。

そもそも，本書の執筆者達はそれぞれの研究を始める際，本書のような形でその成果が出版されることになろうとは予想していなかっただろう。そのため各章は本来独立した論文として成立していたものである。そのことは，本書の魅力であるが，1冊の書籍としては，本書を通しての総合的なまとめの議論が展開されるような終章が提供されていないなどの問題がないわけでもない。そういう意味で本書は，「様々な島をフィールドにした研究のカタログ」と評するのが一番わかりやすいのではないだろうか。

ところで，評者がもっとも気になった（気に入らなかった）のは本書のタイトルである。「離島研究」は，確かに間違いではない。しかし，編者は，まえがきの冒頭でその研究対象である「島」を「離島」と呼ぶことは好きではないと述べている。その好きではない言葉をなぜ使ったのか。そこには島々が抱える今日的課題や今後ますます厳しくなるだろうと考えられる状況を考慮し，「あえて“離島研究”とした」とある。なんとも消極的である。確かに多くの離島は，人口の流出と急速な高齢化の進行にともない状況は悪化の一途をたどるかもしれない。しかし，このような時代において離島に関する研究がまとめられる際に，「こういった時代だからこそ」というようなタイトルが付けられないのだろうか。事実，本書で取り上げられた島々は，これからの時代に可能性を感じさせる島々も多かったのではないだろうか。

また，タイトルに「研究」という言葉を用いることによって一般の読者を遠ざけることになるのではないだろうか。本書は各章において，よりわかりやすく読みやすくなるような工夫が見られるが，タイトルによって敬遠されることがあるとすれば，いかんともしがたい。このような平凡な発想の裏を付いたとすれば，なんともむずがゆい思いである。

本書は，これから離島をフィールドにして研究を行おうとする場合や，離島に限らずさまざまな研究方法について学ぼうとする場合には必読である。また，これまで離島に何の関わりもなかった方にも是非一読をお薦めしたい。

（谷川典大）